説教20200503　エゼキエル34:1-10 ヨハネ10:11-16 24 2 21-200

「わたしは良い羊飼いである」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　復活節も第よんにちとなりました。今日は花の日礼拝としてこのきれいな花々を会堂にお飾りして礼拝を捧げています。どうかこの花々とともに主なる神様に礼拝を捧げることが出来ますように。

　さて、はじめに今日は二つの信条をご紹介します。わたしたちがよく知っている使徒信条は「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」からはじまる信条ですが、古代から教会で、この使徒信条とならび唱えられる二つの信条があります。それはニカイア信条とアタナシオス信条です。但し、アタナシオス信条のほうは、現在、ほとんどの教会で唱えられることはなくなってしまいました。ニカイア信条のほうは今も、広く唱えられています。実は改革長老派と呼ばれる教会においては、毎週唱える処も多いのですが、皆さんご存じだったでしょうか？

　ニカイア信条の出だしは次のように始まります「私たちは、唯一の神、全能の父、天地とすべて見えるものと見えないものの造り主を信じます」

　見えるものと見えないものとして、すべてのものは造られています。一例を挙げましょう。十字架を例に取りますと、この別府不老町教会のある界隈かいわいは一方通行の道が多いのですが、ある納入業者さんを教会まで道案内するのに、次のように案内したとします。「その十字路を一方通行の標識のとおり右折して、次の十字路をまた一方通行の標識に従って右折すると、右側に十字架が見えますのでそこが教会です」と説明したとしますと、この時、十字架は目に見える標識としてはたらいているのです。

　しかし、私たちクリスチャンは、この十字架にこそ神様の愛があることを知っています。でも神の愛は目に見える標識の様に入ってくるものではありません。そういう意味では、十字架は目に見えない神の愛をあらわす象徴としてはたらいているのです。

　このように考えていきますと、すべて造られたものには、見える標識としての働きと、見えない象徴としての働きとがあるのではないでしょうか。とても面白いことだと思います。

　さてもう一方のアタナシオス信条のほうですが、この信条は今ではほとんどの教会で唱えられなくなったと申しましたが、中世までは、多くの教会で毎日のように唱えられていたのです。今忘れられようとしているその信条の中身は、全４２節から成ります。そこには私たちがどのように一致して、一つとされるのかが切々と説かれています。何節かをお読みしたいと思います。２５節より「そして、三位には相互に前も後ろもなく、いずれも他より大、あるいは小というのではない。しかし、三位はみな共に永遠であり、共に等しい。このように、すべてのことにおいて、前に述べたように三位は一体において、また、一体は三位において拝まれるべきである。それ故、救われたいと願う者は三位一体の神をそのように思うべきである」ここには、三位一体のことが、分かりやすいとはいえませんが、切々と唱えられているのです。

　このニカイア信条とアタナシオス信条のことをどうぞお覚え頂いて、今日の聖書箇所に聞いてまいりたいと思います。

　エゼキエルは預言者の一人で、バビロン捕囚にあい、バビロンの地から、エルサレムの牧者たち、すなわち、ダビデの跡を継ぐイスラエルとユダの王たちに預言をしました。イスラエルとユダの王たちが、主の言葉を聞かず、他の東洋諸国の王たちと同様の、ぜいたくな暮らしに明け暮れ、養うべき羊の群れを顧みないでいる状況を、誡めるよう、エゼキエルは主なる神から御言葉を託されて、それを王たちに伝えたのでした。エゼキエルは具体的な王たちの名前を銘記はしていませんが、ここに書かれていることは非常に具体的なことで、エゼキエルは目に見える王たちの堕落と横暴とに対処するために働いたのです。今日の旧約聖書箇所に書かれている牧者、羊飼いとは、堕落したイスラエルとユダの王たちのなまなましい現実の姿そのものなのです。その王たちの統治のゆえに、羊たちすなわち民らは、散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりじりにさせられたのでした。具体的には、バビロンのネブカドネツァル王に引いて行かれ、異国の地での散らされた生活を余儀なくされたのです。

　旧約聖書のミカ書を書いた預言者ミカもまた、堕落した王たちに対して次のように語っています。ミカ書３章１１節、旧約聖書１４５２ページをお読みします。

「頭たちは賄賂を取って裁判をし／祭司たちは代価を取って教え／預言者たちは金を取って託宣を告げる。しかも主を頼りにして言う。「主が我らの中におられるではないか／災いが我々に及ぶことはない」と。」

ここで預言者ミカは、頭たる王だけではなく、時の祭司たちも預言者たちもお金という見返りを要求して働いており、しかもそれを悪いことと思っていない、という有様を赤裸々に糾弾しているのです。

勿論、イスラエルとユダの王たちの中にも、御心に従い、良い統治をした王たちもいました。なかでもダビデ王は時に罪を犯しながらも、理想とされる統治をおこなったよい王の最たる者でした。サムエル記下の最終章２４章、旧約聖書５２３ページによりますと、疫病が起こったイスラエルの国で、ダビデは次のように祈ります。

「御覧ください、罪を犯したのはわたしです。わたしが悪かったのです。この羊の群れが何をしたのでしょうか。どうか御手がわたしとわたしの父の家に下りますように。」

ダビデ王は心から主なる神にこのように祈ったのでした。

　果たして、今の世におられる目に見える王様でこのように自らが打ち砕かれつつ、祈れる方はいらっしゃるのでしょうか。

　さて、今日の新約の聖書箇所、ヨハネ福音書１０章１１から１６節では、私たちの主、イエス・キリストさまのことが語られています。

　イエス様は今は見えなくされている私たちの王様です。そして祭司であり、預言者でもあります。イエス様は良い羊飼いで、私たちを片時も休むことなく導き、統治していてくださいます。しかも、私たち一人一人をよくご存じで、名前で私たちを呼んでくださるのです。そのようにして、私たちが窮地に陥らないように見守り導いていてくださるのです。

私たちはイエス様と離れずに歩んでいくことがとても大事です。しかし、そこに雇い人という羊飼いにあらぬ者がいるというのです。１２節に、雇い人はオオカミが来るのを見ると羊を置き去りにして逃げる、とありますが、さて雇い人はどこに行ってしまったのでしょうか。この問いに関して今から１６００年程前の牧者アウグスティヌスは次のように説教しました。「ああ、雇い人よ、お前はオオカミがやってくるのを見て逃げ出した。お前は答えて恐らく、見よ、わたしはここにいる、逃げたのではない、と言うだろう。しかしお前は沈黙していたのだから、やはり逃げたのだ。お前は恐れていたから沈黙していたのだ。恐れとは精神の逃走である」とアウグスティヌスは説きました。これは、現代の私たちが無関心の罪と呼びならわしている愛の欠けを、鋭く指摘した説教だと思います。私たちは、たとえ一緒にいたとしても相手の心の中から目をそらしていては逃げたに等しいのです。そこに相手との霊の交わりはありません。反対にたとえ一緒に居なくても、相手の姿が見えなくても、恐れずに霊の交わりがあるところには、羊飼いと羊の関係が保たれているのです。私たちの兄弟アウグスティヌスはこのことを、パウロが手紙によって、遠く離れた教会を諭し励ました事例を挙げて説明しています。

　ではわたしたちはどのようにして雇い人ではない、良い羊飼いの声を聞き分けるのでしょうか。それは、イエス様が私たち全ての人を知っており、また私たち一人一人もイエス様を知り信頼していることによるのです。ダビデ王は自分の国の民らのために、自らが打ち砕かれて民らを疫病から救おうとしましたが、イエス様はそれとは比較にならない深くて広い愛によって、私たちを救おうとされているのです。ですからイエス様は、この囲いに入っていない他の羊のことも同じように気にかけておられるのです。そして羊のために命を捨てられるのです。そのような、まったき良き羊飼いであるイエス様を私たち一人一人が知っているということは何と幸いなことでしょう。

　私たちは、そうしてまったき一人の羊飼いであるイエス様によって、一つの群れとされていくのです。又、イエス様は神の子として一匹の羊でもあります。ここに三位一体の神秘があります。

　私たちの兄弟アウグスティヌスは三位一体の神によって私たちが一つとされていく様子を次のような美しい言葉で説いています。「羊飼いたちはあの頭を喜びとしていた。あの頭のもとで心を一つにしていた。彼らは一つの霊により一つの体に結合されて生きていた。そしてそれゆえに、彼らはみな、唯一の羊飼いに属していた。」

　今日は花の日礼拝でありますので、ここからはこの花々、そして子供たちに語りかけたいと思います。わたしは最近ある方から、子供向けのファーブル昆虫記をプレゼントされました。その方の子供たちも昔、愛読したというその本を読んでいますと、ファーブルが昆虫観察をしながら暮らしていた地域では羊の放牧が盛んであったことが分かります。フンコロガシを解説する章では、近所の若い羊飼いが登場します。若い羊飼いは年老いたファーブルから次のようにフンコロガシの観察を頼まれました。「ひまなときには、大フンコロガシの様子を、よく見ていておくれ。そうして分かったことは、どんなことでも、わたしに知らせてくれないか。」と。それで若い羊飼いは羊を飼いながら、フンコロガシの様子を注意深くみていたのです。すると、彼はファーブルも知らなかった西洋ナシの形をしたふんの団子を発見したのです。その後二人はこの梨型のふんの団子が、卵を産み付けふ化させるまでの幼虫の住みかであることを突き留めました。

　この若い羊飼いと年老いたファーブルとの交流を思いますと、そこには私たち現代人が忘れかけている、見守りによる交わりの姿が見てとれます。私たち現代人はあまりにも忙しくしすぎて、このように年の離れた人たちとゆっくりと話をし交わる機会を失いがちです。しかし実はそういう機会にこそ幸いな時間、そして新たな発見が隠されているのです。なぜならば主イエスキリストの父なる神は、被造物という一つの群れを、一つ一つが違って、個性的でしかも欠けのある**部分**としてお造りになられたからです。そして主なる神はその一つ一つの**部分**である私たちが、相手をよく見ながら交流されることをよしとして、とても喜ばれているのです。

お祈りいたします。

天にいます私たちの父なる神様、あなたはわたしたちのうちに御子を送られました。それは私たちが、神の子となり、一つの群れとなって、愛し合いながら代々に生き、一つの喜びに入れられる為です。その神秘の御業を思い、私たちはあなたに感謝と賛美をささげます。

どうか一つの聖霊によって私たちを満たし、私たちを永遠の喜びへと導いてください。そうして私たちが雇い人であることの罪からお救いください。

　あなたが、いつも囲いの外にいる人々のことも、気にかけていてくださいますことに感謝します。あなたが招いておられる永遠の命への道を、私たちが共に歩んでいくことが出来るようにしてください。

父と聖霊と共に一体であって、代々に生き支配しておられる主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。